朝鮮通交大紀

三

内閣文庫
和書
類 三一七〇九號
一〇冊
一七八函
一八架
(三冊)

内閣文庫

内閣文庫
番號 和 31709
冊數 10 (3)
函號 178 504

史五五

国立公文書館
National Archives of Japan

1724

国立公文書館
National Archives of Japan

朝鮮通交大紀巻之三目

壽院公 再任

天正十六戊子年豊臣朝鮮を伐ル乃計有り故

公柚谷庵廣城ゝゝ朝鮮より申りて説ゝ豊臣小

通信あるべき旨ゝ城請きたりし乃事

一通信副使全誠一 公下優ゝ所ゝ擬ゝ乃書

ありし及事

萬松院公 復任

一天正十七己丑年 公言藤城上官ゝゝみゝ

副官多り　長壽院と乃市使と称し柳川
調信ホと日〻朝鮮を城と為し通信使を
迎へ歴年多りし事
一此時通信副文倉藏一大四小貳二殿乃為を
論ち二書有し事
一天正十九辛卯年　公家藏柳川調信ホ
直使を被ふ使を被ふ乃事
一此年　公金山り為まみ川より朝鮮を深
さ少多りしの事

一文禄元壬辰年豊臣小西行長加藤清正外
諸將ホ〻朝鮮ホ代し出　公ホ〻出陣
ち〻ち免ら徒多ち〻ち事　附清正陸海君
順和君の為ち城攻ち〻ち事
一日二年豊臣為ち朝鮮を責れの事
附豊臣命し〻行長乃臣小西飛騨別乃臣
早田四郎を海を〻て明國ホ使し徒
多り〻乃事
一此沈　公書ホ朝鮮慶尚道巡察使法度諸ホ

いろいろあるよの事を云ふ[illegible]彼国
[illegible]書を復する事
一慶長二酉年豊臣秀吉[illegible]
為[illegible]被[illegible]国ふ[illegible]乃事

朝鮮通交大紀巻之三

第廿一代　長寿院公方義[illegible]州碧ふ任せ[illegible]
[illegible]時後陽成院御宇関白豊臣秀吉天正十六年
庚子明乃萬暦十六年朝鮮昭敬王廿一年豊臣
朝鮮を伐たる　公方[illegible]相谷康廣を
彼国ふ遣し実白ふ通信せむ　彼国ふ成
許さる
〃時今[illegible]　公ふ復する擬せ書有豊臣
語を朝鮮ふ借り明国を伐ての事及び特遣

船乃事守護代歟代図書乃事を載せらるる書尤も紀次

擬答對馬島主書

見書具審示意多慰使臣經年海外行李無難此實賢主人向國之誠新太守扶護之勤何幸如之第縁主人有疾未獲一面曷勝恨々新太守承足下之意禮待惟謹至以未得送行為恨委差特送之船護渉滄海益見足下事大之敬良感且荷但書中覩縷之事則自有朝廷處置非使臣所與知也然足下委惠長牋責望於使臣者甚重何敢不一言以曉之乎大不許特送而廢守令肅拜者此非近年所為亦非無故裁減而不承權輿也其歳遣定額俱在先王朝約條貴島豈無文籍之可考者乎如代官雖曰代太守施法此乃島中權設之官非朝廷所知也島主既受圖書代官又欲受之則是一島二主也其可乎且庚午之變是乃島人自速其辜而見絶于太朝也足下所謂積惡之餘殃者不其然乎今雖年遠人異何可輕壊舊章

以復己廢之規乎朝廷之於貴島亦何厚薄之有
有功則賞之以職而許其來朝有罪則鐫其職而
不許相通此己事之明驗也島中如有願復其舊
者足下何不令輸忠效勞而聽朝廷之指揮乎不
然則足下雖望使臣之轉達不可得也如何如何
書中又有足下所不當請而使臣所不敢聞者犯
大明取路南邊一事是爾夫南邊我國地方也大
明我朝臣事之國也由我地方而犯我臣事之國
則是假手隣國而身與犯上之事也設有下経捷之
路果如足下之所云者朝廷其可開路以嚮導之
乎我國之法除釜山一路皆以賊倭論斷如有犯
者則邊吏必以軍法從事此貴島之所明知也而
足下今有云云之請者豈不以下信使既通義為一
家雖犯境行師亦無所禁故耶雖然貴國友邦也
大明君父也今若許貴國便路則是知有友邦而
不知有君父也於人為不祥於德為愆義匹夫且
恥為之況堂堂禮義之邦乎復有一言可以取譬
者足下試聽之介兩國之間者貴島也足下東事

貴國北順我國畏天事大之敬至矣倘有賊寇借
足下之路以犯兩國則足下其許之否名為事大
而潛啟賊路則其反覆不信甚矣貴國且不可出
借路之言況足下而敢為此言乎且足下之言曰
弊邦今之時勢至後五百年何敢如此乎隨時勢
講隣交好矣云云亦何意耶兩國和親只在於信
義二字而已強弱非所論也若不以信義為重而
惟強弱是視則此實市井之交豈大國之義乎今
関白建國之初首重交隣之義還浮獻誠其禮至
勤故我殿下特遣專使以答其意固非觀時勢較
強弱而為之向背也足下觀時勢云云者於是乎
失言矣使臣則只以通信為職何敢以此等言轉
奏於朝廷乎足下其思焉

和文

書付ハ具ニ文言ヲ尽シ使臣海外年ヲ
経テ一切恙ナク来ル実ニ貴主人
高麗国小順ニ乃誠及ル新君宇技彼乃ル
所ニ誠ヲ尽シ但主人病あるよ

ようくいはゝ一面ふかくたゝ[illegible]
よく是下の言を信け諾て彼使者物を乃
船をしく彼を波還さ[illegible]
是下大国ふ使ふ新の数をえる但書中永
而乃事に[illegible]乃志る[illegible]
是一言して以て答ふ[illegible]特遣を減し新代乃
朝を廢さ[illegible]乃事に[illegible]
なくしく古例を用ひさるる[illegible]又[illegible]乃
定数ある[illegible]朝乃約定[illegible]事[illegible]

文書乃考ふ[illegible]
太宰よ代り法令を施[illegible]
旅ら設ふ乃官ふして朝廷乃開く所ら[illegible]
[illegible]国書を受代[illegible]国[illegible]
[illegible]一[illegible]二[illegible]
庚午乃変[illegible]人みれ大国ふ絶[illegible]
諭ら是下乃いまふ[illegible]乃[illegible]今
年久しを[illegible]人別ら[illegible]
くこを[illegible]武を破ら[illegible]

きもいや我国乃半島を侵し屋蕃ふんあるを
以て功あるを賞して職を授くしを
朝鮮を伐し罪あるを責て兵を削り和通を
事とせるを以て倭中乃人四方に散ずるを
彩ふかゆゑあるを以て吳下に走て忠誠
をつくし労を奉し以て朝廷乃指揮を待さしめ
屋紀のこと又吳下乃人ふ屋かを以て使を
乃以て啓聞を屋かるの有大師を犯し
時代家り南亟よ侵むとふるの吳やゑ南遠い

我邦乃地方に大明は家の居とし使の居家
家り隣国をして我こと地とより家の居とし住る
乃国を犯さしめ吳を以て隣国を假てみたこの
をを犯せるなりしを以て使船を
吳下乃以船をして南海を犯
をを政を借て以て吳を以て等く屋ものや吳家
乃注登山乃一路を除くの外海賊を以て吳を
論じ他路を犯さしめ者は更に使
軍法を以て吳を處に生殺乃略を志

学ぶ所なり然るに貴下今日の
使節院より国王義一家ふ同盟を以て交誼を
相し師を行るといへども又貴国を恭敬する而
貴国より給りといへども貴国ハ朋友乃国ハ
大明を君父乃国ハ義兄を以て使誼を借さ
貴朋友者乃戦志ハ君父者を忘れ
西夷を貴国を仰ハ況や礼義乃邦ハ
をや貴一言乃警ふ無きハ今日国乃罪
乃ものを貴国ふ東貴ふ仕へ如乃如し

帝国ふ順ふ為ふ寇徴あ用ふ誘を貴国ふ借り
以て日国を犯さんといふ貴下許し給ふ
為を借さむや貴国ふ誘を借り乃
詞を設へふ況や貴下ふ主ふをや又貴下
言ふ敵邦今日の時勢ふ於て接百年の久し
於て用ふ所なむ隣や始く渉勢ふ通い
隣交をいふ国と支日国乃始ふ信義
乃二字ふ主る乃を信義を以て重しとせ
ふ法語を以て市道の交にふ

大国乃義を紛し今関白始て書を立川隣交を
市し虜を送し城首を斬を献を花を
故を以て我が国書を信使を通ずるに
勢を足強を校へ是をあるを紀伊乃
言を失へり其使者を京都に
職を奪ふ言を以て通信を以て
を指奏を無し是不法城おすへ
第廿二代　萬松院公再び州守に任し改て
義智と諱し　従四位侍従対馬守と称し　注時

後陽成院御宇日し紀関白天正十七年己丑
豊臣秀吉朝鮮を伐むと　公家乃為
僧玄蕃を西宿とし　みかわ　副官に柳川
控を助　調信等と日し朝鮮王城より久義
東平彼を留め通信乃事を絶せ　に
平彼国乃臣民沙乙背回叛　我国に入
海賊を掠奪し　により　叛民を掠へ
又海賊を道り平彼通信を遮へしと
かは　公調信を我国に　沙乙背回おそれ

賊倭を捕へ生像擄を送り捕くんを者され
ふたりく彼國屬〻ゆく聖十八年庚寅三月
ふたりく僉知黄允吉司成金誠一を上副と
典籍許筬を書狀官と通信使を派せ也
此時金誠一系州より送り書を奉あ梨
大内小貳乃二殿書契の事を論せ事なり
考ふて左に記す

與對馬島主上副官書　此所謂上官是玄蘇副調信也

某白上副官對馬島主三足下兩國講和作為一
家故我朝於貴國諸殿亦許其修聘信使往來殆
將二百年于茲矣惟其滄海限隔聲聞莫接其存
其没但莫聞知故一番接待之後則雖累百年未
嘗廢絶此三足下之所曾知也今茲使臣之來也
我殿下念交隣之義推恩數於諸殿有若京極細
川等六殿處皆有禮物矣及到貴國則右等諸殿
無一人存者關白殿下以信義為重不以我國之
不知為可悔乃能處置得宜留禮物以俟代職者
而具載曲折于國書中俾使臣得免委命於草莽

其處事明白實非常情之所可異及也嗚呼関白
殿下之盛意既如此使臣何敢不盡言於此日以
貽疑阻之端乎三足下其亮之夫周防大内西海
之小二殿亦通聘于我國而最親且舊者也去夏
使臣之過也業已致賜物矣雖然使臣留貴國且
一年亦豈無聞見乎在都之日諸僧皆言二殿亡
滅已久今到赤關則寺僧及村老皆曰大内殿義
隆四十年前為毛利殿所殺子孫亦皆夷滅今主
周防長門石見等七州者毛利之孫晃元也至如

小二殿則得罪於関白其亡亦有年代守其土者
乃小早川隆景也云云本月初六日到藍島則島
倭之言亦與赤関所聞無異也夫京僧皆知文字
識古今者也其言必不妄也況赤関乃大内之管
内也藍島亦小二之地也寧有不知之理乎以是
観之二殿之亡亦如京極細川等殿萬々無疑也
然於使臣之贈禮物也三足下不為之直言者何
哉噫三足下之心豈庸衆人之所能測哉彼京極
諸殿之亡三足下非不知之也一國命令制在関

白未禀関白之前三足下何敢以国内事情透漏於他邦乎惟其若是故當初禮曹之作書契使臣之傳禮物也三足下終不敢吐實此固理勢之所必至豈三足下有意於欺隣国而如此哉此使臣所以恕足下之不言而益多其臨事慎密者也今則關白殿下昭示大信已將諸殿存亡洞然別白而言之矣惟茲二殿之存亡三足下更何所難而不言之乎前之不言者以無関白之命也今之可言者以有関白之令也前後諸語默雖殊皆合於時宜亦何害義之者嗚呼使臣既明知二殿之亡矣雖親見二殿之面猶不能無疑況過境之際所謂二殿者未嘗馳一介之使以候中境上雖或使人于堺濱二殿之書乃一筆所寫也二殿總統方面豈無寫手而借書於堺濱乎此必無之事也足下於是而不言則始為害義失信而不免欺隣国之為上矣如何如何且我朝通好於貴国者豈有新舊之異夫廢興存亡有国有家者之常今者毛利殿小早川既有二殿之土如欲代二殿而繼上好則從實

輸款以聽我朝之命可也何必黙々自欺以假敗
亡者之名號乎念惟三足下皆以関白殿下之心
為心者也必不以使臣之言為非也使臣亦奉命
于我朝以通信為職何敢閟黙受偽書以誑我殿
下乎此事理之至明且著者也三足下其垂察焉

和文

南国乃好を以て我朝半国の諸侯よりも
ゆくゆくの使聘を許し使臣を通ずるもの今
既に二百年他海路の隔を以て生涯を
労紀知る而所一変を以て其一式揚伝
許を者百年を黙ぬと以へ共絶て共を慶
を以よりて今使臣の来ること甚細川尊氏殿乃
雪諸侯る而の諸国者半国と至ること及んで
始て聞く右清殿今年人来ること冥白
殿下然ること雪しく始て礼物式目を
職を代る乃人ありを待て共式授し共上表の
曲折共式図書の内を載て事に雪ること
明白なること実小常情の及ぶ所に非ず今疑ふ

唐紀ものを挙く若く是れ之を下す者なり
周防乃大内西海乃小二聘城高國と通じ於
也親しく兵を率し去夏使臣の如所より古れ
場和をいたしたり然も今に至るまで一言乃
高麗に参ずるものあるに於ては乃ち是を使臣
より命ずる時は小二殿乃亡ぶ所久しく今赤間
関より西に向く大内殿義隆四年お毛利
殿乃為め敗せられ滅ぶ今周防
長門石見国乃七州あるを以て者は毛利乃孫

輝元なり又小二殿より西に向く羅を関白より授
るの亡ぶを既久し今亡ぶ者は小早川
隆景なりと本国に蔵る如く所に関く亦
又赤間より去く吳なる事ありしを京僧
皆父宮成知り古今を識る者如きの如ふ乃
必妄なるべし且赤間は大内乃管国より蔵る
小二乃地や亡管下乃人をして是を知らざる乃
理あるべしや是二殿乃亡ぶ又京極細川等の殿
如くなる為く筑紫あるべし使臣乃礼物を送る

あるべくいうむを三条下官ようつく是を告ける
おのふと拵の京極殿殿乃方ハ三条下是ハ武者
さるよ殿ハ仕実白の命ありき武ハ国内の事
情殿ハ俗部ハ漏ハむこと欲世ハ家を以て
初め拵曹ハ諸殿ハ送るの書契を造り拵仕
礼初を作ハ高りく高りく三条下始終ハ実を
告ハなり夫隣国を欺くに意あり
いかむや御も今に高ハ関白殿下既ハ示
告ハり諸殿乃拵ハ告ハ時ハ三条下に

告ハ時ハ何乃云かハ記ありとハ高や今既ハ
ハりく二殿乃方面を知る時ハ告ハ親ハ
二殿乃面をえるといへ毎拵殿ハ記あハ
又ハ殿を乃るの付二殿ハ川ハ一流を
是を境上ふ候せハ拵堺演ハ生ハ初て人を
使ハといへも二殿乃書契を見ハ
一ハ乃方ハる者如ハ二殿乃半記をもつて
是ハ書多くハ高を堺演の人ハ信むや
是決ハ多記乃理如や上慶與拵亡ハ国武

[illegible]家[illegible]乃常や今毛利蔵小早川既
二度の出を多つく又二殿乃好[illegible]を帝國乃
面[illegible]ゝ[illegible]ゝ事を[illegible]宜[illegible]
[illegible]の要を以て明らかに所記乃[illegible]
いろ也老既亡後の名輝を借[illegible]用むや
今後[illegible]命我朝と乃り通信を以て感[illegible]
敬[illegible]ゝ[illegible]の信書を[illegible]帰て帝殿下を
歎く[illegible]や[illegible]事紀乃[illegible]
[illegible]おもふは三[illegible]下[illegible]我察せむ

擬重答上副官對馬島主書

昨承僉復書具悉二殿曲折得以祛疑惑之胸良
荷良荷細讀來書疑惑滋甚雖欲無言得乎三足
下更加察焉來書所謂奉使外國者獨諳國事其
他則不能者似矣然使臣留京都五閲月矣京僧
之通古今諳國事如上官者可車斗量載也貴國
事情雖不敢出口至如二殿存亡則無関利害故
人ヒ皆能言之使臣何能記誰某也夫輝元之代
大内隆景之代小二則謹聞命矣然足下以為輝

元隆景二殿之同姓也輝元則食邑毛利隆景則
移居小早川故人以是稱之云々此則不敢聞命
也蓋大内之姓多太良也小二之姓源氏也両家
世為寇讐争戦不息此異國之所明知也今毛利
之姓則使臣雖不及聞然小早川實輝元同姓叔
父也果與源氏之小二為同姓乎此一疑也大内
小二乃諸殿之大者也撫有山陽西海之地傳世
既久在人耳目今果有之則貴國童稚無不知之
況識字之京僧管内之藍島赤関乎雖曰輝元食
邑毛利隆景移居早川亦豈肯舍二殿之顯名稱
縣邑之微號乎此可疑者二也上年使臣之過一
岐也請令二殿使者受書幣于赤関則三足下既
許之矣使槎若小留則豈不能面傳乎三足下托
以関白促行匆々過去使臣初以為然一聽指揮
矣然于時関白殿下方在東征固無促行之理而
所云若此々可疑者三也鄙書所謂過境之時不
馳一介之使者非敢歸責於三足下蓋初則許二
殿之來受到赤関則曾不暫留二殿雖欲馳人候

問得乎且今島主之先出也二殿既知使臣之還期矣獨不可留書境上傳付使臣乎附書島主而於使臣則不墮一字之問此何意耶臘月二十一日過備後境也有官船過去舟楫甚盛問之則乃毛利殿朝京者云在京寺時小早川隆景來見至請觀射聽樂又請額字而去問諸寺僧則乃是都督侍從守豐筑二州者也毛利小早川若果為二殿而受書幣則寧有相值而不相問相見而不相謝之理哉此可疑者四也倭俗雖不知中華之字如本島及堺濱等處亦有解漢字通書契者豈以二殿地方獨無識字者乎若果無之則今書契誰所書耶噫受鄰國書幣莫重者也而無印信無圖書投借書於千里之外欲人之相信得乎此可疑者五也凡此五疑者雖使三足下易地而思能無可疑乎當初禮曹之作書契也譯官既言于三足下矣若知諸殿存亡則其時雖未及言可向使臣道之也然而三足下不能者豈不以未稟于閣白之故耶此使臣所以不以不言為恨而益嘆其

臨事慎密者也今則関白殿下處事明正若此何
獨於二殿虚而為實無而為有乎三足下大槩吐
實而不敢盡言者將稟関白之命而為之善處也
豈有他哉今使臣之受書契以去者欲歸報朝
廷而取進止也亦豈以二殿為尚存耶孟子曰不
直則道不見使臣之意亦猶是也願毋以觸諱為
可罪一以関白殿下之盛意為心則彼此無疑阻
之弊貴國信義益暴於隣國矣不亦美乎三足下

和文

此復書を受て領収益甚し来書乃いとゆゑ
仮を外国に奉る者生国事の外なるゆゑ
あるとなく論ずる所なく仮令生死に
当るとも既に月日を経て京僧乃古今を通じ
詰る上官乃古に比ぶる事の車に載せ斗
生国乃事情を知らあへていはんとも
二度実存亡を利害ふあり為ものき
を以て人を能くせんを以て辞元乃大内を代り

隆家乃小二代ハ高橋を審にせり但輝元
隆家ハ姓ハ源氏なり輝元ハ毛利を食し隆家は
移る小早川を名へる人を以て氏を称に
といふ元を以ハ諸説有や支大内の姓ハ多
良ハ源氏なり小二の姓ハ源氏なり吉家世々雄敵
多り年戦しる長尼吳國の時より初て
今毛利乃姓後に伊と改て及ぶ
小早川を実ハ輝元ハ姓の叔父なり源氏の小二と
ハ姓を出や疑ふ無尼ハ大内小二ハ
注敵乃大内ハ山陽西海道地をもち
世を傳ふ多り既久し今果しく亡ぶんハ幸稀も
又是代ハ也や宇代滅る乃京僧管内乃義
弱布間を輝元ハ是代毛利ハ食み隆家ハ移りて
小早川を名へる毎敵ハ二敵の大名代
移ハ縣邑乃微名を称ハ也や疑ふ無尼乃二所
多り吉家使乃吉波ハ多敵を
使を赤間ハ多り書都を傳めもふ
吉ハ三ハ下既ふ名を約せり毛赤間ハ

及びて三殿下関白宣旨を授けられ
托し給ふ旨をもて
二殿より使ふるを我国
東国を征し夷使居乃行を授さしむ乃理あ
ひや極も三殿下乃いふ所かくの如し然ふ
無礼乃言詞の前書ふ二殿をもてるのは二殿
一价来使を絶せしといふものい殺害せ三
殿下を帰ふるを我国仕初二殿宣使物一向
来りて書幣を交し給ひ赤貧
五ふ及びて使ふ我を侵し三殿を
ふ二殿宣使を絶ふ
殿下今爾乃先ふ殺害使居国ふ乃
事二殿殿を等しいふもや是宜しく
宣使を焼ふいふ所以を
しく都ふ殿を焼ふ使居ふ使ふ
一字乃問歴をいふのあ殿を行ふや朕自世
一日使後の焼を見ふ時宣和あ川ふ殿を
殿を問ふ毛利殿京ふ到ふ

京者ゝ生るの間小男川清兼来り清ゝ間を観
樂を少願ふ成ものゝ書を与ふるつ
ゝいく故智伝授を冠二枚乃至地と毛利豊川
呆ゝく二度ゝ院我出帯を交ゝ色いめ日を
おもゝく其ゝの術を授ゝ乃理あゝ也難ふべき
の四ツなり 儒俗中華乃文字成識ゝ人ゝも
本語おゝい堺浜等乃而又清字成識ゝ
ゝ日記ゝ二度の地方清字を識ゝ人ゝ
美濃字を識ゝ人ゝ

内ゝ清人乃書ゝ所不ゝ
交所ゝ者ゝ乃ゝく事紀ゝ
院ゝを人ゝ居ゝ乃出ゝ
なゝ其成千里乃外小
ゝく後書ゝを信ゝ難ゝ
欲ゝ難ふ無紀乃ゝ
拙ゝく二ゝ下ゝ
ゝく難ふ而なゝ
乃時ゝ院宮ゝ

夫書帯を帰国ふ
今ゝ差ゝ
図書の押ゝ
投ゝ人ゝ
果
成ゝ
成
成乃難ふ無紀
ゝ作ゝ出ゝ
ゝ初め禮曹ゝ
ゝ院ゝ

時を存ぜい候と雖を以て不及ともに毎度
書を使者を差へ〜御と御不審なるの儀ハ
いまゝ関白殿下乃命を受ることなり 今
関白殿下既ゆゑこの儀せり御と三殿下相と
大概をいひく殿く書くを使者のみを伺ひや
今後使者ゆゑこの二殿乃文ひを知く相手書
契を交さく書るまを嘆く共朝廷より被
下慶賀を給ひとゆゑ乃ゆゑ相と二殿を以て
せもや那ゆゑ三殿下幸に関白殿下の書を給く

天正十年戊申

〃 翌十九年辛卯明乃万暦十九年 此年春信玄種
柳川調信をもく通信使を渡海せり

〃 此年豊臣秀吉御不朝鮮を伐さしむ 公家
小松殿及みかの参内より起こ出ける
豊臣秀吉を朝鮮より信り明国を使ひ義を
絶し遠ゆ平和を通きしむ世ゆ和んハ朝鮮亡
国乃患をもくゆゑ以ゆ成ハ
義ゆ不ゆ使ゆ彼国

文禄元年壬辰四月明乃萬曆廿年朝鮮以敬王
廿五年豊臣秀吉小西摂津守行長加藤主計頭
清正以下諸将を朝鮮に遣す朝鮮王城を
公を以て先鋒とし清正主計頭清正攻て
彼国會寧府に入り臨海君順和君乃高官を
擒る
〃 同二年癸巳明乃萬曆廿一年廿四年明国謝用
梓徐一貫沈惟敬を以て我国名護屋に来り豊臣
秀吉和好乃事を講せし豊臣家に於て六月豊臣
秀吉擒る而乃高官朝鮮王城を上
公行長に命じ家臣を以て謝用梓徐一貫と
同じく燕京に至り和を講ぜし　公家臣
早田四郎兵衛を以て行長乃臣小西飛騨如安と
同じく燕京に遣せし時　公書を朝鮮
慶尚道巡察使洪履祥に送り高官を還
すべし乃ち　李我州力を用いらるべし乃
為作者しなり　書乃略に出還王子非清正之
功乃自己所致力清正自此視如仇讐相激日甚

今聞朝鮮與清正信使絡繹一不通使於我輩何
也又いへらく大明許和不可必若朝鮮許之則當
悉衆渡海願獻各陣遺糧以賑饑民とあり
洪履祥とゝく書を復せしめ以時往復
乃書の事左の如し

答平義智書

得來書辭意縷知足下有悔禍尋舊之意甚善
甚善既往之事言之無益然其中有一二宜復者
不得遂已我國與日本交好如兄弟講信修睦無
纖毫間隙今二百餘年至於對馬島則稱為東藩
臣附我國故國家待之尤厚舡粟以哺之輦布以
衣之擧一島之民自乃祖乃父無不被涵濡卵育
以得生活秋毫皆國家之恩足下年幼或未聞知
詢之黃髮則可知也嗚呼虫蛇微物猶知報恩人
而未知恩惠以怨報德則真虫蛇之不若也然豈
一島之人盡皆為此耶其陰懷禍心造起兵端者
必有其人而兩國生靈肝腦塗地以千萬計斯人
者實天地鬼神所不容明無人誅必有陰誅聖人

云天道不潛福善禍淫又曰人衆則勝天天定亦
能勝人一時強弱不足論也書中所言先以禍端
相告者皆是我國家忠以事上信以交隣過於推
誠不誠詐誘以至於此受禍雖滋於義無愧尚何
言哉王子無恙清正自以為功今聞事出足下若
果然則舊義猶未盡絶而亦天實誘衷以緩其禍
惟此一事足感人心嘆尚嘆尚大明天覆地載兼
愛南北之民不欲窮極兵力以戕生靈初許貴國
納款沉遊擊往來非一封貢之許已有聖旨不日
可成而不意中間流布之言以為日本實無款附
之意其所望亦不止於封貢而前日犯順之計猶
未已也此言非出於大明之人亦非出於朝鮮之
人也實出於足下同事人之口日益傳播疑亂其
間繼以有安康搶掠之事以實其言以此皇朝滋
如怪責雖沉遊擊周旋致力於其間而朝廷亦不
甚信事機參差至今未決尚誰咎哉此事足下久
必自知今不須云云夫以春秋小國猶以城下之
盟為恥況於堂上天朝臣妾萬國八表承風物無

違一拒上貴一國恭一順不一篤而欲下以一悖一慢一要上之是猶下欲一其
入一而閉中之門上也此在一足一下深一思善一處之如一何上耳國
家於一足一下釁隙雖一滋而凡所一處一分一悉從一天一朝所一命
儻足一下翻一然改一圖知一止一戈之為一武戒一不一戰之自一焚一
於一天一朝一則極致一恭一謹之節一於一本一國一則變一其反一噬之
心一庶一幾天一道助一順人一謀與一能東一隅之逝雖一不一可一追
而桑一榆之失補一之未一晚謹一此奉一復餘不一具一悉

和文

東書を拜く呈下福を悔い旧好を絶ちふ乃意
わ[illegible]を重[illegible]に付乃[illegible]今[illegible]
[illegible]も帝国日本好[illegible]を交[illegible]既ふ兄弟乃
[illegible]に[illegible]対馬守ふ[illegible]は[illegible]東藩称
[illegible]に[illegible]乃故を以て[illegible]家[illegible]
[illegible]事[illegible]一[illegible]乃民[illegible]生活
乃[illegible]を交[illegible]
[illegible]呈下年幼く[illegible]
[illegible]生旧[illegible]
恩を忘[illegible]怨を[illegible]
[illegible]徳を[illegible]但[illegible]

懐紀兵端既起候事一面乃人を撃ち殺す
ものとは必ず人ハ皆天地
鬼神乃責をゆるさ[illegible]所無之ものを超允
善と福と淫と禍と天道乃考ある時ハ一時乃
徴候をいふものあり書中のいふ所
その首て禍端を欲く如き者あり[illegible]といふ
所謀を推し隣国と交を欲く兵船を発し
ものとなる欲く寇ものを招き禍を交ぜ添し
寇人とも義をおもて脆弱なるものを乃
義を紀清正欲く已ん功とく今いふ所を以て
時の実ふ是下為国の為人を用ひるより
出るものなり[illegible]不若如也世義行者
者く強ひるとく内を実り天道ハ[illegible]
人を誘き欲く寇[illegible]也此て
人人を威をもるを[illegible]乃ち大明南北乃民を
兼愛しく兵威を窺ひ生靈城害をもとし
欲きたるよりく渡海登州とく事注をむ封貢
乃事おもひ久しかるべし[illegible]中官

流布乃言ハ日本実に忠順乃意ハ[illegible]
所為と称貢り止為ハ中国を犯ス計
ありと共実に皇下事を用ひ人乃言より
出ル[illegible]果して安康の変あり故を以て大伴
高と共を殺へり[illegible]中国を恭順の誠を表
さは此ハ為ハ乃理あるもや且皇下を祭
おもて[illegible]の恭謹を致し[illegible]国と於て[illegible]
反り怒ふのん[illegible]変化るとおもふ[illegible]福を悔
ふ乃教を[illegible]あるもの也

一、雄略三年戊戌八月豊臣秀吉薨去遺命し事
諸将を[illegible]引纏帰[illegible]安家と於て諸将
始て兵を撤き国ハ帰事の時百兵福前後
七年戊連て両国通好乃事絶へ[illegible]

朝鮮通交大紀巻之三終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan